ＩＳ-インフィニットストラトス-篠ノ之束の弟子

rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－インフィニットストラトス－篠ノ之束の弟子

【Ｎコード】
Ｎ１９６５ＢＡ

【作者名】
ｒｅｉ

【あらすじ】
『ＩＳ』
それの開発者である篠ノ之束は誰からも新の意味でＩＳを理解されなかった。彼女の認識できるものたちは誰一人としてＩＳを理解できない。使えるだけでは意味がない。彼女が求めていたのは理解してくれる人だった。そしてそんな人物が現れた。その人物は後にこう呼ばれるようになる
『篠ノ之束の弟子』と

束唯一の弟子（前書き）

なんとなく息抜きで書き始めました

感想募集中です

それとＩＳ－インフィニット・ストラトス－知識を求めるもの　もできれば読んでみてください

束唯一の弟子

『篠ノ之束』

稀代の天才であり世界を変えたＩＳの生みの親でもある
しかしながら非常に気難しいというかとらえどころがないというかとにかく他人嫌いが過ぎる性格ゆえに自分とその身内しか認識しない変わり者である

そんな彼女が認識できるのは４人

ブリュンヒルデ『織斑千冬』とその弟『織斑一夏』そして自分の妹『篠ノ之箒』の４人である

それ以外の人間は認識しないらしい

しかしそんな彼女が姿をくらませる時に一人だけ連れて行った人間がいたのだ

他人に対して関心を持たずまた、認識もしない彼女が世界から狙われ姿を隠すというときに一人だけ連れて行ったのだ
その人物は彼女が認識できる４人ではなくまた一切の経歴が不明の人物であった

？？？ｓｉｄｅ

ここは某所にある研究所

某所というのは実際のところここがどこだかよくわからないからだ
あの時急に束さんに連れられて世界を点々とすることになったからだ
束さんは開発したＩＳにより世界から狙われる身
それによりひとつの場所に長いできず見つかれば最悪命の危険すら
あるという状況
それに動向している俺は束さん以上に危険な状況にあった
束さんはその能力ゆえにつかまっても殺すには惜しいだろう
なので殺される可能性は低い
しかしながら俺はそんな能力もなく向こうからすればなぜか一緒に
いた少年という認識のはず
さんざん拷問されたあげく殺されるのは目に見えている
なので逃げるときはそれこそ死ぬ気で逃げた
そのため何とか今まで生きているのである
それにしてもなんで俺ここにいるんだろうね？
俺は確かに両親を早くになくしてそれからは一人暮らし状態だった
ので別に誰も心配しないんだろうけどなんで束さんが俺を連れてい
るのかがよくわからない
別に俺は天才じゃない
もともと俺と束さんは知り合いというほどの間柄でもなかった
俺は両親を早くになくしている
そしてその両親が研究者であってことからよく家にある両親の残し

た研究などを見ていた
それによっていろいろな知識をつけ論文も読んだ

そしてあるとき束さんが提出した論文を読んだのだ
それがＩＳに関する論文

今までの科学の常識を覆すような内容
当然その学会では相手にもされずむしろ笑われたようだ
しかし俺はその内容に興味を持った
書かれている内容は今までの常識からすればありえない内容
しかし彼女の言う定理が本当ならば確かに実現可能な内容だった

俺はもともと自分の目で見ることを文献よりも信じている

なので直接本人に尋ねにいった
最初は束さんは俺が自分の妹と同じぐらいの年であることと他人であることからろくに相手にしてはくれなかった
しかし俺は束さんの論文を何回も読みそれに関する考察を束さんに提出し続けた
そして次第に束さんもとりあってくれるようになった

今では一緒に研究するほどになっている

しかしだからこそわからないのだ

なぜ束さんは俺を一緒に連れて行ってくれたのかが

何度聞いても「それはね～れ～くんだからだよ！」とよくわからないことお言われて明確な答えが帰ってこない

いつかわかるといいんだけどね～

束ｓｉｄｅ

やあやあ天才篠ノ之束だお！だおだお！

今私はれ～くんと一緒に地球上にあるあるところに隠れている

や～自分でやったこととはいえなかなかに面倒だね～逃げるのって

まあ天才の私だからなんてことはないんだけど面倒であることに変わりはないんだよね～

といっても他人に邪魔されることなく研究できるからいいんだけどね

さて、世界に対して逃げている私だけど実はこの旅には同行者がいるんだよね！

世界でただ一人、私のＩＳに関してあの『白騎士事件』前に興味をもってくれた人物

そしてもしかしたら鍛えれば私をも超えるかもしれない逸材

それが鶺鴒玲（せきれいれい）くん

通称れ～くん！！

いや～まさか世界にはこんな子がいるとはね～

束さんもびっくりだよ！

最初は特に意識もしないようなどうでもいい存在だった

これは本当

でも彼は私の論文から考えられることを考察して毎日のようにもってきた
最初は面倒だし興味もなかったから読むこともなかった
でもいい加減うっとおしいので見てみることにした

そして驚いた
まさかここまで理解しているなんて

しかも論文には書いていなかったＩＳのコアの製造方法の考察やそれを集中管理するための方法などの考察書かれていてそれは私が考えているものと同じかそれ以上のものだった

だから気づいた

彼は０から１を生み出すことはできない

でも１を１０や１００にすることに関して天才なんだと
だから私は姿を隠すとき彼を連れて行った

私の持ちうる知識のすべてをあたえて彼がどんなものを作るのかに興味があった
なにより彼は初めてＩＳを理解してくれた
たぶん今でも彼以上にＩＳを理解しているのは私以外いない
ち～ちゃんはもちろん箒ちゃんもいっくんも理解できない
それを理解できる初めての存在

だから一緒につれてきたんだ♪

彼がこれから生み出すであろう物を見せてほしい
どんなすごいものができるのかを見せてほしい

そのためなら私は自分の持ちうるすべてを教える

れ～くんはよく自分をなんで連れてきたのかを聞いてくる

だから私はそのたびにこう答える

「それはね～れ～くんだからだよ！」

鶺鴒玲（せきれいれい）

彼は世界で始めての対等の存在

そして私の持ちうるすべての知識を持つもの

束唯一の弟子（後書き）

感想評価お待ちしています

ＩＳ学園入学［前］（前書き）

なぜか息抜きで書いているほうが更新が早いという・・・

感想評価お待ちしています

ＩＳ学園入学［前］

玲ｓｉｄｅ

「はあ、ＩＳ学園ですか・・・」

あれからいろいろあり俺は１４歳になった
今年で１５歳になる俺だが束さんに突如ＩＳ学園に入学するよう言われていた

確かに俺はＩＳを動かすことができる

これは俺と束さんが一緒にＩＳの開発をしている時にわかったことなのだがどうやら俺は男でありながらＩＳを使えるらしい

原因はわからない
というよりもなぜＩＳが女性にのみ反応するのかもわかったはいないのだからそれも当然かもしれない

これに関しては生みの親である束さんも首をかしげているところである
世間ではわざと女性にのみ反応するようにしたなどといわれているが本当のところはそうではない

もともとＩＳのコアは自己学習をするように作られておりそれが何らかの形で変異してしまったのではないかと俺と束さんは考えているが、本当のところはわからない

さて、話がそれたが俺はなぜがＩＳ学園へ入学するように言われている

「しかしなんでまた急にそんなことを？」

「それはね、れ～くんの専用機の試験をするためだよ」

俺の専用機

それは俺を束さんの共同開発により出来上がった世界最強のＩＳ
しかし俺をベースに作っているため使えるのは世界で俺だけという代物である
そしてここでは確かにそれの性能実験をすることができないのである
そのため完成はしているし武装も問題はないのだが実際の戦闘はしたことがないのである

「あそこは世界の代表候補生とかが集まるから性能実験にはちょうどいいでしょ？」

「まあ、確かにそうですね。でも大丈夫なんですか？俺って一応お尋ね者なんじゃ」

俺は束さんと一緒に行動してるため世界から狙われる立場にある
しかもおそらくは束さんにつぐほどに危険な状況だろう
仮にも俺ｈあ束さんと一緒に行動している
ということは必然的に研究などの情報、現在位置などの情報を持っていると思われるはず
そのため俺が捕まるということはそのまま束さんに迷惑がかかるということになるのだ
だからこそ俺はためらう

「大丈夫大丈夫！それに今年は箒ちゃんといっくんが入学するからね～。れ～くんも一緒に通ったほうが都合がいいんだよ」

「それはどういう？」

「箒ちゃんは私の妹でいっくんはち～ちゃんの弟。そしてれ～くんはこの束さんの弟子。ここまで言えばわかるよね？」

なるほど

確かにここまで重要人物を集めておけば逆にそれを狙うものたちをおびき寄せやすい

そもそもＩＳ学園は在学中は外部からの交渉を受け付けない独立した存在

そして狙ってくる敵がいるのなら俺たちは学園で迎え撃てばいい

実にシンプルな図式ができあがる

「なるほど。理解しました。あいつらを誘い出すつもりなんですね」

俺は束さんの目的に気がついた

俺たちをひとつに場所にそろえることにより一番食いつくであろう存在がいるのだ

「うん。あのうるさい亡国（はえ）企業を一掃しようと思うんだ」

俺たちは亡国企業とは何かと縁がある

まあ腐れ縁なのでこちらからすれば願い下げなのだが

あそこはＩＳのデータを狙う中でも一番うるさいのである

いままでにも何回も襲撃されている
一度危なくやられるところだったこともある
それゆえにここいらでたたいておきたいのだ
「なるほど。でもいけるんですかね・・・俺中学も通ってないですし」
「心配は要らないよ～。なんとかするから～。ち～ちゃんが」
なんとも見事なまる投げ振りである
「はあ、まあ千冬さんもご愁傷様です」
「あははは～で、通ってくれるよね？」
ここで通ってくれない？ではなくくれるよね？と聞くあたりやはり束さんだ
先ほどはああいったがもうすでに手を回してあるのだろう
この人はなんだかんだで抜け目がない
いや、実生活では抜け目だらけではあるが・・・
しかしこういったことに関しては本当に抜け目がない
しかもこういうことは必ずといっていいほど事後承諾なのだ
そのため俺が何を言っても時すでにおそいことが多いのである
「ま、いいですよ。こいつの性能実験もしたいですし」
俺は首から提げている黒いペンダントを見せながら言う
こいつは俺の専用機の待機状態である

「あはは～、そう言ってくれると思ったよ♪じゃあ明日入試に行ってきてね」

「はい、わかりました・・・って明日なんですか！？」
話が唐突過ぎる。すこしぐらい前もって教えてくれてもいいのに。
まあ、束さんはいつもこうだから今更とやかく言うつもりもないけどというよりなんとなくこうなることがわかっていたからなんともいえない気分なわけだが
すこしぐらいこういって予想は外れてほしいものなのだが・・・

「神龍（しんりゅう）の調整も終わってるんだしちょうどいいよね？」

神龍というのは俺の専用機の名前である
本当はもっとふつうのあたりさわりない名前にしようと思ったのだが束さんが譲らずまあ名前ぐらいでなにか変わるわけでもないのでそのままになっている

しかしなんというか中二感ばりばりのネーミングだよね

束さんがいま作ってるＩＳだってなんかそんな感じの名前ついてたし

「はあ、もうすでに決定事項なんでしょ？でも明日ってここからＩＳ学園まで結構時間かかりますよ」

ここ日本からかなり離れたところにある某国のある場所である
場所は詳しくはいえないのだがすくなくともすぐにつくような場所ではない
飛行機を使ってもかなりかかる距離である

「だから今すぐでてもらうことになるね～なにせ待ってるのはち～

ちゃんだから遅れると怖いよ～？」
なにやら面白そうに言う束さん
この人これが目的だな？
この人のことだ
ＩＳ学園にしらどこにしろなんだかんだでハッキングして映像を入手するに違いない
そしてそれをみて楽しむということをやるのがこの人なのだ
やれやれ、こういうところで才能発揮しなくてもいいでしょうに・・・
「千冬さんですか・・・遅れたら命なさそうですね・・・」
あの人は時間にうるさいからな・・・
一応何度か面識はあるのだがそのたびに束さんをアイアンクローで沈めるところを目撃している
なんというか人間の限界を超えているような人だからな
なにせブリュンヒルデなんて呼ばれているのだ
そのひとにもし本気起こられるようなことがあれば・・・想像したくないな
「はあ・・・命の危機感じるんで行ってきます」
「いってらっしゃ～い」
束さんの満面の笑顔で見送られ、俺はＩＳ学園に向けて出発した

まじで間にあわなかったらどうしよう
そんなことを考えながら俺は飛行機に乗るためにまずはこの山を高速で降りていくのであった
あ、もちろんＩＳつかってだよ？

ＩＳ学園入学［後］　（前書き）

感想などお待ちしています

ＩＳ学園入学［後］

あのあと何とか山を降りることができたのだがそれからがいろいろと大変だった
なにせ俺はこれでもお尋ね者
もちろん一般人は知るはずもないことなのだが国の上層部は知っていたりする
なので空港に着くまでいろいろと面倒ごとが多かった
いや、ホントいろいろとあったよ・・・
で、なんとか日本にたどり着きＩＳ学園の前まで来ることができた
一応俺が来るということは学園側に伝えているはずだから迎えの人がいるはず

あ、ちなみに今日はＩＳ学園の入学式の日らしい
そして俺の試験が行われるのも今日

俺入学式の日にテスト受けるんかい！！
それってどうなのよと思わないでもない
まあ試験といっても俺は世界で最初の男性操縦者なので間違いなくここには入れるわけだが
世間的には俺ではなく織斑一夏が世界で初めてということになっているが俺がＩＳを起動したのはそれよりもはるかに前なので実質俺が世界初の男性操縦者なのである

それとこっちについてから知ったことなのだがどうやら俺が束さんの研究室から出て飛行機に乗っている間にあの人俺がＩＳを使える男性だということを世界中にばらしたらしい
俺は飛行機に乗っていたためそれを知ることができなかったのだが

俺が飛行機を降りるとそこには取材陣が待ち構えていてそのことを知った

またまた面倒なことをしてくれたよ・・・
いずればれることとはいえせめてそれは俺が学園についてからにしてほしかった
なにせあの取材陣ほんとしつこいんだよ・・・
俺が何を言っても後をつけてくるんだよ
いやほんとやってられないよね

今までも束さんと一緒に世界を逃げてたけどこんなに疲れたことはないよ
それだけしつこいというかなんと言うか

あ、ちなみに今も俺の周りをうろうろしてます
俺が男性操縦者ということは必然的にＩＳ学園に向かうので先回りされてたみたいだ

はあ・・・

それにしてもこの学園かなりでかいな
さすがは世界で唯一ＩＳ操縦者を育成するための学校ってところか
日本も案外金余ってるんだね～
でも残念ながらセキリティのレベルはかなり低いみたいだね
ここまでの移動中かるくハックしてみたけどかなりあっさりといけたし
仮にもＩＳっていう兵器について教える学校なんだからもう少し危機感持ったほうがいいと思うんだよね
しかもどうやらこの学校相当黒い部分があるみたいだし
なんせここの生徒会長はなんか暗部組織の党首みたいだしその従者

もここにいるみたいだし
なんつかホントに安全なのかねこの学園・・・
「お前が鶺鴒玲か？」
「はい？」
ＩＳ学園の現状について考えていると急に声をかけらった
声のしたほうを見ると黒のスーツにタイトスカートを身にまとった
かなり目がきつい女性が立っていた
そう、織斑千冬である
「お前が鶺鴒玲かと聞いている」
「はい。そうですけど……」
「私はお前のクラスの担任になる織斑千冬だ。束から話は聞いている。ついて来い」
そういって俺を先導するように歩き出す織斑先生
ていうか俺のこと覚えてないんですね～
まああったのはかなり前のことだしそれも仕方がないといえば仕方がないんだけど
「というか俺入試受けてないんですけど？」
そう、俺は今日ここに来たばかり
なので入試を一切受けていないのである
「ああ、それならば束からの推薦ということで免除になっている」

おいおいそんなん許されていいんだろうか
改めて束さんの影響力の大きさを知る瞬間だった

「はあ、まあいいですけど」

俺はまあ納得するしかないんだよね～
まあ実際入試なんて俺にはあってないようなものなんだけど
それだけ俺の専用機はおかしな性能してるんだよね・・・

「ところで、お前は専用機を持っているらしいな？」

「知ってるんですか？」

「束に聞いた。なんでもあいつが直々に開発したと言っていたが」

「性格には俺と束さんの共同開発ですけどね」

「あいつの作ったものだから、また突拍子もない機能でもついているんじゃないだろうな？」

おっしゃるとおりです
このＩＳはおそらく現存するどのＩＳと戦っても間違いなく勝てるほどの性能をしてる
しかももともとが俺をベースに作っているため俺の動きや能力に完全についてくる
しかも稀代の天才が自らの知識を総動員して作ったのだから一切の妥協などない
まさにＩＳの完全系といえるものなのである

「あははは・・・おっしゃるとおりです」
なのでここは認めるしかないのである
「とりあえずあまり問題は起こさないでくれ・・・」
織斑先生は額に手を当てながらいう
そうとう苦労しているんですね・・・
「まあ、善処します」
といっても俺も問題を起こさない保障はできないのでとりあえずそういうしかないわけで
「頼むぞ・・・さて、着いたぞ」
織斑先生に言われて立ち止まりクラスを確認してみると、一年一組と書いてあった
ここが俺のクラスらしい
「男子は同じクラスにまとめることになったから織斑もこのクラスだ。呼んだら入って来い。いいな」
「はい」
まあ妥当な判断でしょうね
どうあがいたって俺と織斑はこの学園において良くも悪くも目立つ存在なのである
それをわざわざ別にするということは手間を増やすということになる
ならば最初から一箇所に集めておくにこしたことはないのだろう

まあ、その分担任である織斑先生の苦労が増えることになるのだが

なにやら教室内から織斑先生の自己紹介やら女性とに悲鳴やらが聞こえて来るんだが・・・
なかで何が起きているんだろうか？
知りたいような知りたくないような・・・

「今日からこのクラスで一年間生活していくことになるが、急遽この学園に通うことになった編入生を紹介する。まあみなあの馬鹿のせいで知っているとは思うが、とにかくあまり騒ぐなよ。鶺鴒、入って来い」

いや～やたら馬鹿を強調してますね
束さんいつも迷惑かけてるからな～
もうすこしあの人もおとなしくしていればいいものを
まあ無理なんだろうけど・・・

とりあえず織斑先生の指示に従い教室に入る
そしてあたりさわりのない自己紹介をする

「鶺鴒玲です。みなさん知っていると思いますが男です。何かと迷惑をかけるかもしれませんが一年間よろしくお願いします」

ま、こんな感じでいいだろう
こういう機会あんまなかったからどういうこと言えばいいかわからないけど
つかなんかみんな反応ないな？
もしかして俺やらかした？

「きゃ・・・」

「ん？」

「キャーーー！！！」
うるさ！？つかドンだけ声でかいんだよ！？
鼓膜破れるかと思ったぞ！？

「男子よ！　二人目の男子！」

「きれいな髪！　きれいな目！」

いやいや俺そこまできれいじゃないんだけど
たしかに生まれつき髪が赤茶色でなぜか目の色が灰色なんだけどそんなにきれいって言われるようなものではないと思うんだけどね

「あの篠ノ之博士の弟子と一緒のクラスなんて！」

・・・？どういうことだ？
俺が束さんの弟子？
確かに俺はＩＳに関して束さんい教わったけどなんでそれがばれてるんだ？

「鶺鴒・・・言いたいことはよくわかる。だがあきらめろ、あの馬鹿は自重ということをしないからな・・・」

俺の言いたいことを察した織斑先生がそういう

なるほど・・・束さんのせいですか

まあ束さん意外に考えられないんだけどすこしやりすぎなんじゃ？
ま、そのおかげである意味俺は守られてるんだけどね
でもそれと同じぐらい面倒ごとにも巻き込まれるんだけど・・・
「なんか少し鬱になりそうなんですけど・・・」
「気持ちはよくわかる・・・あいつには昔から苦労させられた」
「「はあ・・・」」
なんか織斑先生と仲良くなったような気がする
おもに束さんの被害者的な意味で
しかしいい加減この騒ぎを収めないといけないだろう
織斑先生もそう思ったようで声を張り上げる
「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」
なんと言う鬼教官
つかここはどこぞの軍隊でしょうか？
でも確かに実力はあるのでだれも逆らわない
というよりも単に怖いからなのかもしれないが・・・
そこらへんは束さんと似たところあるんだよね
改めて教室を見渡すと当たり前だが織斑以外は全員女子という空間
副担任と思われる緑髪の先生。正直先生には見えないが・・・

クラスは全員で３１人そして男子は俺と織斑の２人だけ
というよりもこの学園に男の生徒は２人だけ
総数は忘れたが間違いなく面倒な状況であることにはかわりない

２人意外全員女子という空間
そして束さんによりなぜか知名度急上昇の俺
鬼教官織斑先生
副担任らしいがそうは見えない先生

確実に面倒ごとが起こりそうな布陣だろうこれ・・・

やっぱ来ないほうがよかったかもしれない

いきなりの宣戦布告とブリュンヒルデの威圧（前書き）

タイトル長いですよね・・・

感想評価おまちしています

いきなりの宣戦布告とブリュンヒルデの威圧

「織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。これからよろしくな！」

「こっちこそよろしく頼む。俺のことは好きに呼んでくれていい」

「じゃあ玲って呼ばせてもらうよ」

俺と一夏は1時間目がおわってすぐにお互い挨拶をしていた
というのも俺たち意外に男子がいないこの状況ではそれを紛らわす
ためにもお互いの名前ぐらいは知っておいたほうがいいのである
そして今現在俺たちに突き刺さっているこの視線を紛らわすために
も話相手は必要なのである

ちなみに現在廊下には他クラスの女子、二、三年の先輩も大勢詰め
掛けている
なんというか一昔前のパンダ状態である

「そういえば、玲もＩＳ動かせるんだよな。俺以外みんな女子だと
思ってたからすげーうれしいぜ」

「確かにな。とはいえ俺たち以外全員女子という環境もいただけな
いけどな」

俺たちは雑談に入っている
これもあたりからの視線による圧力を紛らわすのが目的だ
正直な話あんまり変わらん気もするんだがそれでもなにもしていな
いよりは幾分ましである

「それにしても玲って束さんと行動してたんだろ？」
一夏はふとそんなことを聞いてくる
まあ気になるのも無理はない
束さんの他人嫌いはそうとうなものだからな
「まあね。なぜか気に入られたみたいでね。一緒にＩＳの研究したりしてたよ」
「てことはＩＳについてかなり詳しいのか？」
「それなりではあると思うよ。まあまだわからないことが多い分野だから完全に知ってるわけじゃないけど」
ＩＳというのは誕生してからまだ歴史が浅い
そしてそのオーバーテクノロジーの塊であるそれはいまだ誰一人として解明しきれていないのである
こういっている玲ではあるが実際のところは束の次にＩＳに関して詳しいのであるが本人は自覚していないようである
と、俺たちがそんな感じで雑談を続けていると一人の女性とがこちらに近づいてきた
「ちょっといいか」
「え？」
突然、話しかけられて一夏が声をあげる
ギャラリーの間では『あなた話しかけなさいよ』という空気と『ち

ょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』という緊張感が満ちている
そんなに話かけたいなら普通に来ればいいのにね～
一気に来られるのも困り者ではあるのだが少なくとも今みたいに周りからじろじろ見られるという空気よりはそちらのほうがましである

「・・・箒？」
「・・・」

話しかけてきたのは髪をポニーテールにまとめ少し不機嫌そうに見える目をした女子だった
箒という名前らしい
そういえば束さんが『妹に箒ちゃんっていうかわいい子がいるんだよ～♪』といっていたような気がする
たしかに美人ではあるかもしれないが俺的にはああいうタイプは正直苦手だな

もっとのほほんとしているとか小動物的なのとかがベストだな！

「廊下でいいか？」

「ああ、でも・・・」

一夏はどうやら俺のことを気にしているらしい
しかし一夏よ、できればおまえの後ろにいる箒さんの様子も気にかけてやってくれ
今も『空気よめよ』的な視線を俺に送っているんだよ
正直やってられん

「早くしろ」

「早く行け。俺のことは気にしなくていいよ」

「お、おう」

俺はその視線から早く開放されたいという思いから一夏をせかす
一夏も俺の言葉を聞きそのまま箒さんと一緒に廊下に出て行った
それにともない大部分の女性とがそれを追うようにいなくなった
なにやら『ま、まさか抜け駆け！？』とかいろいろと聞こえていた
ような気がする

大変だね～一夏

とはいえ今も若干残ってるんだよね
まあさっきより少なくなったし俺も暇なのでこっちから声かけてみ
るか

「えっと、なんか俺に話したいことある人は遠慮しないでいいよ？」

こういうことで少なくとも先ほどのような視線からは開放されるだ
ろう

「じゃあわたしから～」

振り返ってみると、明らかに袖の長すぎる制服を着たのほほんとし
た女子だった
なんであんなに袖長くしてるのだろうか
ちなみに周りの雰囲気が変わった
なにやら『先を越された！』的な空気になっているんがそこは気に
しないほうがよさそうだ

「わたしは～布仏本音だよ～よろしくね～」

話しかけてきた女性とは布仏本音というらしい
たしか調べたときに出てきたな
暗部組織更識の従者だったような・・・
こんなのほほんとしたのが従者なんだろうか？
人は見かけで判断できないとはいえ明らかに向いているとは思えないんだが

と、そんなことを考えているのだがそんなことは顔に出さずに俺はそのまま会話をする
これは束さんとの生活で身についたスキルである

「こちらこそよろしく、布仏」

「本音でいいよ～私もれ～くんって呼ぶから～」

いきなりあだ名で呼ばれるとは・・・いまどきの女子はみんなこうなのだろうか
束さんも俺のことあだ名で呼んでたし
しかも奇遇なことにその呼び方束さんと同じだし
まあそもそも俺の名前から考えられるのはそれぐらいなんだけども

「じゃあ本音って呼ばせてもらうよ」

俺がそういうと本音はうれしそうに微笑んだ
そんなに名前で呼ばれるのはうれしいことなのだろうか？
そうしていると俺の周りには残っていた女子が押し寄せてきた

「私は鷹月　静寐(たかつきしずね)よ。よろしく！」

それを皮切りにみんな自己紹介を始める
そんなにいっぺんに来られても困るんだが
ちなみに最初にここにいた本音はというと・・・

「きゅ～～～・・・・」

つぶれていた・・・
みんながいっせいに来たせいで逃げるのがまにあわなかったようだ
人垣に埋もれていた
なんというかこういう状況だというのにあれ見てるとなんか和むんだよな～
なんか小動物みたいな印象をうけるんだよ

とそんなところで救いのチャイムがなった

「あー、チャイム鳴っちゃった。またあとでね～」

「ああ、また」

俺の周りにいた女子はそれぞれの教室なり机なりに戻っていった
そして教室にいた全員が座り終えたころに一夏と箒さんが戻ってきた
箒さんのほうはすぐに席に着いたので問題なかったのだが

「とっとと席に着け、織斑」

「・・・ご指導ありがとうございます、織斑先生」

一夏はなにやら考え事でもしていたのか席に着くのが遅れ織斑先生
による出席簿攻撃を受けていた
それにしても痛そうだな・・・
そして2時間目が始まった

「・・・であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法によって罰せられ・・・」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生
教壇に立って、教科書片手に授業を行っている
さっきのＨＲではかなりおどおどした様子だったが授業になるとその様子は消えていた

というかなぜに副担任が授業してるんだ？ちなみに担任は脇で腕を組んで授業を見ている
たしか副担任の仕事は担任の補佐と担任不在時の代役のはずなのだが・・・

さて、それはおいておくとしてさっきも言った通りこの学園はレベルが高い
つまるところこの学園に入れるやつはみんなそれなりにできるやつだということになる
そのはずなんだが・・・
もう一人の男である一夏の方を見てみると、教科書と山田先生を交

互に見ては、ぱらぱらと教科書を行ったり来たりさせている
さっきから授業には関係のないページを開いては頭をひねっている
クラスメイトは皆真面目に授業に取り組んでいる
ちなみに俺はこういった本は読んだことがないためそれなりに新鮮なので教科書に目を通している
もともと俺は束さんに教わったのでこういう本などはよんだことがないのである

『ＩＳ』
正式名称『インフィニット・ストラトス』
宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ
開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていった
ＩＳは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるＩＳアーマーから形成されている。その攻撃力、防御力、機動力は非常に高い究極の機動兵器。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや「絶対防御」などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることはほとんどない。
ＩＳには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる。ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ、実行へと移せる
ＩＳは自己進化を設定されていて、戦闘経験を含む全ての経験を蓄積することで、ＩＳ自らが自身の形状や性能を大きく変化させる「形態移行」を行い、より進化した状態になる。第三形態までが確認

されている。コアの深層には独自の意識があるとされていて、操縦時間に比例してＩＳ自身が操縦者の特性を理解し、操縦者がよりＩＳの性能を引き出せるようになる
コアを製造できるのは開発者である束のみであるが、ある時期を最後に束はコアの製造をやめたため、ＩＳの絶対数が４６７機となり、専用機を持つ者は特別扱いされることが多い。コアの数に限りがあるため新型機体を建造する場合は、既存のＩＳを解体しコアを初期化しなくてはいけない

まあ、おおむねそのとおりなのだがやはりこれはまだまだ甘いというのが俺の感想である
そもそもなぜコアを束さんが４３７個しか作らなかったのかなどに関してなにも考察されていない
教科書であるということを考えてもこれは正直内容としては薄いな～

と、それにしても一夏はホントになにやってんだ？
先ほどからなにやら表情も青ざめてきているような・・・
まさかわからないとか言うんじゃないだろうな？
これは基礎どころか常識の範疇のはずなんだが・・・

「織斑くん、何かわからないところがありますか？？」

するとそんな一夏の様子に気がついた山田先生が一夏に対して話し掛けた
一夏ははっと顔を上げてまたなにやら戸惑っている

「あ、えっと・・・」

「分からないことがあったら何でも聞いてください。なんせ私は先

生ですから！！」

なぜか先生ですからを強調している山田先生
日ごろ先生としての威厳に乏しいのだがこういう態度がさらに威厳を小さくしていることに気がついていないのだろうか？

「・・・せ、先生！」

「はい、織斑くん！！」

一夏はついに意を決したように山田先生に話しかけ山田先生はどんとこいといった感じで返事をした
が、すぐにそれは崩れることになる

「ほとんど全部分かりません！！」

「え・・・？？ぜ、全部、ですか・・・？？」

・・・おいおいそりゃないだろ
さすがに山田先生も予想の斜め上の返事に戸惑っている

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？？」

山田先生はクラスに対して確認を取る
もしみんなわからないのだとしたらすさまじく問題であるからである
しかし誰も手を上げない
つまるところわからないのは一夏だけ
問題があるのは一夏だけということになる

「・・・」

それはそうだろう
ここにいるやつらはみなこの程度は理解できなければいないのだから

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？？」

そんな状況の中さっきまで腕を組んで授業をみていた織斑先生が確認をとる
その表情はまさかよんでいないのか？という顔をしていた
まあ、でもさすがに読んでないなんてことは・・・

「古い電話帳と間違えて捨てました」

・・・あったよ。てかどうすれば電話帳と間違えるんだよ
たしかに電話帳サイズの厚みはあったが普通表紙みて確認するだろ・・・

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者！！」

織斑先生の雷が織斑に落ちる
若干哀れではあるがこれは確実に織斑が悪い

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「あの厚さを一週間で！？無理だって！」

「やれと言っている」

「・・・はい。やります」
またしても一夏に出席簿が落ちる
そんなにたたかれてたら脳細胞死滅するんじゃ・・・

さて時間はすすみ今は3時間目
教壇にたっているのは織斑先生
そのせいかさっきまでの時間よりもクラス内が真剣さで満ちている
「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」
と、授業を始めようとしたがそこで一度織斑先生は止めた
「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」
と切り出した
「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・つまりは、まあ、クラス長だな」
どうやらこの学園ではクラスの代表を決めなければならないらしく

また、それなりに責任も伴うらしい

「ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はない・・・が、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいるように」

ふむ・・・めんどそうだな

できればやりたくはないがここはＩＳ学園

つまりは俺と一夏を除けばあとは生徒全員が女子

話題に事欠かない俺たちが推薦される可能性は非常に高い

俺としてはやってもいいのだが面倒なのにはかわりない

とはいえ確かに神龍の性能実験をする上でもクラス代表はなっておいて損は無いように思えるが

やはり面倒なのは嫌いだ

「それで誰か立候補者はいないか??推薦でも構わないぞ??」

織斑先生がそういうと早速推薦が出る

「はいっ。織斑くんを推薦します！！」

案の定一夏が推薦される

「私もそれがいいと思います！！」

「私もー！！」

最初の発言に重ねるように一夏を代表にという意見が次々に上がる

「お、俺！？」

「では候補者は織斑一夏・・・ほかにはいないか？？もう一度言うが、自他推薦は問わないぞ。それと織斑。いい加減に席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？？」

「私はれ～くんを推薦しま～す」

「なぜに？」

一夏に押し付けられそうだと思った矢先俺の横から俺を推薦する意見が上がる

推薦したのはもちろん口調からわかるように本音だった

そしてそれに賛同する声多数

「はいはい、私も鶺鴒くんに一票いれまーす」

「私も鶺鴒くんを推薦しま～す」

またしても俺を推薦する声があがる

ま、予想してたけどね～

「候補者は鶺鴒玲と織斑一夏。他にいなければこれで締め切るぞ」

織斑先生がそういうと一人の女子が机をたたきながら立ち上がった

「待ってください！納得がいきませんわ！！」

立ち上がったのはさっき一夏に突っかかってきていたイギリスの代表候補生のオルコットであった

あ、そのとき俺はトイレに行ってました
なんか面倒な予感がしたので女性とが一夏のところに来た時点で教室から脱走しましたがなにか？

いやね、束さんとの生活でこういういらないスキルばっかり習得してるんだよね～

「待ってください！！そのような選出は認められません！！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

・・・

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！！わたくしはこのような島国までＩＳ技術な修練に来てるのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

・・・

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！！ＩＳの知識もろくにない極東のサルや、コネでここに入学するような極東のサルがクラスの代表になるなんてありえませんわ！！」

なんかずいぶんと上からな発言だよね

ＩＳの登場でずいぶんとこの手の手合いは増えてるらしいんだけど
実際に見るのは初めてだな
こういうのは束さんも望まないところなのだろうに
束さんのＩＳに寄生する害虫みたいなんだよね
見てて気分悪くなるよホント

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！　大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

なんか一夏が切れた

「あっ、あっ、あなたねぇ！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「侮辱もなにも、先に馬鹿にしたのはそっちの方だ。違うか？」

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隷にしますわよ」

今の時代奴隷制度はないはずな何だけどね
つか俺さっきから空気じゃない？
一夏たちの言い合いに参加してないからね～
「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」
「そうですか？　何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」
「ハンデはどのくらいつける？」
「あら、早速お願いかしら？」
「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」
「お、織斑君、それ本気で言ってるの？」
「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」
クラス全体が笑う
「なに言ってんだよ、俺と玲はＩＳ使えるんだぜ？やってみなきゃわかんないだろ？」
なあ？と言いたげな視線を送ってくる一夏
ここで俺に振るわけね・・・
「あら、そういえばもう一人いましたわね。影が薄いので忘れてましたわ」

あははは・・・なんつかね～ずいぶんと命知らずなことで

「あははは」

「それにしてもあなたはずいぶんと腰抜けみたいですわね」

俺に対しての侮辱を始めるオルコット

まあほとんど聞き流してるんだけどね

「篠ノ之博士の弟子とかなんとか言われてたのがこんな腑抜けなんて、失望ですわ」

いやいやもともと期待自体してなかったでしょうに

つか俺が束さんの弟子って知ってるならその発言まずいと思うんだけどな～

「だいたい「そこまでだオルコット」な、なんですの織斑先生」

なおも言おうとするオルコットを先ほどまで静観していた織斑先生がとめる

「オルコット、それ以上言えばお前は間違いなく消されるぞ」

なんとも物騒なことをいう織斑先生

「消されれ？なぜですの？」

なんでわかんないんだろうね？

織斑先生も頭を抑えてるよ・・・

「いいかオルコット。そこにいる鶺鴒は束の弟子だ。つまるところあいつのお気に入りということだ」

「それが、なんだというんです」

「まだわからないか。お前は束に喧嘩をうっているんだぞ？この時代においてそれがなにを意味するのかもわからないか？」

そう
俺は束さんの弟子ということになっている
つまり俺は束さんにコンタクトを取れるということである
そして束さんは自分のお気に入りの人を侮辱されたりするとなにをするかわからないのである
まあ俺がそのお気に入りなのかはわからないけどね

「そ、そんな・・・」

やっと自分の状況がわかったオルコット
というよりそもそも俺に対してじゃなくても相当問題発言してるんだよね～

「さらに言えばお前は日本を侮辱していたな？確か文化としても後進的な国だったか？そして私たちを極東のサルといっていたな？だがＩＳの開発者はどこの人間だ？言いたくはないがブリュンヒルデの称号を持つＩＳ使いはどこの人間だ？」

オルコットの発言の問題点を指摘していく織斑先生
そのようすはどこか怒っているような感じだった
なぜならいつも以上に威圧感が半端ではないからだ

やはりブリュンヒルデの称号を持つものだということだろう

「そ、れは・・・」

「わかるな？お前は自分で自分の首を絞めているということが。わかったらもう少し考えて発言することだな」

織斑先生はそういうと今まで放っていた威圧感を引っ込める
まあそれでもやはり感じるので怒っているのだろう

「諸君もこれからは十分に考えて発言するように。わかったな」

「「「はい！！」」」

みんなそろって返事をする
オルコットは呆然としているようだ

「それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。まずは織斑とオルコットで戦い勝った方と鵜鴒が戦う。それでいいな」

「はい」

「いいですよ」

「わ、わかりましたわ」

俺たち3人は了承の返事をする

これにより俺たちは一週間後戦うことが決まった
編入初日からずいぶんな面倒ごとに直面するなんてね〜
まあいい神龍(こいつ)の初舞台には少々物足りないがいい機会と思うことにしよう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1965ba/

ＩＳ-インフィニットストラトス-篠ノ之束の弟子

2012年1月5日18時47分発行